

國史彙要

孝格至孝明

卷十四

甲
第
十
六
卷

リ 5
16
14



門伊5
號/6
卷/4

國史攬要卷之十四

天明七年、權大納言源家齊齊以テ、征夷大將軍ト為シ、内大臣ニ遷ス。○時ニ天下大ニ飢エ、米一斗五六升、價ヒ金一圓ニ抵ル。大坂飢民群起メ、米商富豪ノ家ヲ毀ツ、伏見界播州等ノ民、亦聚テ乱ヲ作ス。關東ノ諸國亦蜂起シ、江戸ノ市民數百人、街陌ニ横行シ、米商巨賈ノ宅ヲ壞リ、米金ヲ散乱シ、帳簿ヲ蹂躪ス。府下驟然、幕府即チ吏ニ命メ、追捕シ、米六萬苞、金二万兩ヲ發メ、飢民ヲ賑シ、又吏ヲ諸州ニ遣テ、蓄積ヲ募テ之ヲ賑恤ス。○六月、越中守松平定

笠間 棚谷元善

編輯

甲
方十六号

國史攬要

卷十四

○光緒

信ヲ以テ老中ト為ス、定信ハ田安宗武ノ第三子、出テ、
白川侯定邦ノ嗣ト為ル、學古今ニ通シ、夙一賢明ヲ以テ
著ハル、於是三家相議メ、老中ノ首座ト為シ、將軍ヲ輔翼
メ、大政ヲ委任ス、定信乃チ銳意ニ前代ノ弊事ヲ革メ、一
ニ有徳ノ政ニ復ス、其始テ政廳ニ入ルヤ、澣濯ノ締給ヲ
服シ、食唯一菜、諸老中大ニ愧テ、皆衣食ヲ菲フシ、諸吏相
率テ節儉ニ向フ、乃チ令ヲ下メ奢侈ヲ禁シ、風俗ヲ正シ、
文武ヲ振起シ、人材ヲ薦達ス、一号令出ルコトニ、士民悅
服シ、従前ノ弊政、渙然トモ觀ヲ改ム、時人謂ラク聖帝西
ニ在リ、賢宰東ニ出ツ、淳厚ノ俗待ツ可シト、○九月幕府

麾下ノ士、學ニ志ス者ヲ召メ、書ヲ管中ニ講セシメ、老中
列坐メ之ヲ檢シ、尋テ聖堂日講ノ課ヲ設ケテ、其講師ト
ナシ、士民ニ令メ之ヲ聽カシム、又柴野茂輔ヲ召メ侍講
ト為ス、茂輔名ハ邦彦栗山ト号ス、讚岐高松ノ人、學術淳
正ニメ、詩文及ヒ書ヲ善クス、○八年正月晦日、京師災アリ、
禁闕及ヒ公卿ノ邸宅、街衢佛宇、延燒略々、尽ク、幕府金
數萬ヲ以テ縉紳ニ分テ給シ、又米及ヒ銀ヲ都民ニ稟貸
ス、根岸肥前守鎮衛西上メ之ヲ掌ル、○三月幕府皇宮ヲ
造ル、諸侯ニ課メ役ヲ助ケシメ、松平定信其事ヲ管ス、○
十一月、將軍家齊、吹上廳ニ於テ諸奉行ノ斷訟ヲ聽ク、○

國史彙要 卷十四 ○光緒

寛政元年八月、天皇敕メ行宮ニ釋奠ス、菅原為顯、年甫テ
十四、孝經ヲ進講ス、天皇嘆賞メ曰、秀才ノ名虚シカラス、
○九月、幕府天下諸藩ニ令メ、穀ヲ貯テ凶荒ニ備ヘシム、
萬石コトニ粟五十石ヲ出ス、○十二月、幕府天下ニ令メ
異學ヲ禁ス、物茂卿等古學ヲ倡ヘシヨリ、程朱ヲ排撃
スル者相踵テ出テ、躬行ヲ務メス、放言誇張、風教ニ害
アルヲ以テ是命アリ、○寛政二年正月、幕府天下ニ令
メ、婦女ノ衣服笄簪、高價ノ品ヲ用ルヲ禁ス、○三月
天皇諸廷臣ニ詔メ常ニ節儉ヲ行ヒ、大禮節會拜賀ノ
朝衣モ亦其故ヲ用ヒ、諸進献モ舊額ヲ減セシム、幕府

亦申令メ、居宅ヲ美ニシ、飲宴ヲ設ク、贈遺ヲ厚フスル
ヲ禁シ、麾下ノ士ハ、節儉ヲ專ラニシ、文武ヲ講究シ、
風俗ヲ敦厚ニスルヲ令シ、老中備後守牧野貞長、本
多彈正少弼忠篤等相與ニ定信ニ協和メ、貪暴ヲ黜ク、
廉直ヲ舉ケ、贈遺一モ受ル所ナシ、天下靡然トメ化ニ
向フ、○五月、幕府柴野邦彦、岡田恕ニ命メ聖堂ノ事ヲ
掌ラシム、恕清助ト稱シ、寒泉ト号ス、篤學ノ士、尋テ又
古賀樸、尾藤肇ヲ召メ侍講トナス、樸彌助ト稱シ字ハ
淳風、精里ト号ス、肥前佐賀ノ藩士、肇良助ト稱シ字ハ
志尹、二洲ト号ス、皆博學篤行、君子ノ儒ナリ、栗山ト同ク、

國史彙編 卷十四
○光格

三先生ト稱シ一代ノ泰斗タリ○九月、皇宮及ヒ上皇ノ宮成ル、諸門殿廊皆上古ノ制ニ復ス、天皇大ニ悦ヒ、詩ヲ製メ將軍ニ賜ヒ上皇亦歌ヲ咏メ賜フ、詩ニ曰、遙慕周文園、不羨漢武臺、舊章一是從、新築本非催、百工忽告竣、整賀自東回、拭目向城雉、城雉亦美哉、西殿應規矩、四門總崔嵬、燕雀繞簷集、櫻橘接階栽、豈其為逸豫、講禮共徘徊、委佩僚會將幣、九州來素心、既已足起卧、感塩梅、欣然歌思動、乙夜薄言哉、歌ニ曰、殿造リ、ミカキ立タル嬉シサハ、心ヲ見スル、大和コトノ葉、○十月、幕府醫學館ヲ置キ、醫官多紀安長ニ命メ之ヲ掌ラシム、初メ明和二年、醫官多紀安元、

請ラ之ヲ佐久間町ニ建ツ、是ニ至テ制ヲ改メ幕府ノ所管トナル、後チ災ニ遇テ新橋ニ移ス、○四年二月、幕府大番頭以下ノ士ニ命メ、弓馬刀槍ノ技ヲ演セシメ、家齊臨テ之ヲ閱ス、老中參政以下皆従フ、各金帛ヲ賞ス、○四年、閏二月ヨリ四月ニ至テ、肥前温泉嶽火ヲ發シ、灰石ヲ雨ラス、嶋原地熱メ人歩シ難シ、已ニメ熱水ヲ噴出シ、海亦溢レ、嶋原天草死スル者三万人、肥後死スル者二万人、○五月、大坂災アリ、懷德堂延焼ス、享保中中井誠之幕命ヲ以テ建ル所ナリ、於是教授中井積善ニ金ヲ賜ヒ之ヲ修メシム、積善竹山ト号シ、草茅危言逸史等ヲ著ハス、弟積

德履軒ト号シ、通語ヲ著ハス、皆學術文章ヲ以テ称セラ
 ル、○九月、幕府始テ科試ヲ聖堂ニ設ク、四書小學ヲ一科
 トナシ、五經歴史并ニ論策各科アリ、本日經書ハ某章ヲ
 掲ケ、策論亦同シ、試ニ應スル者、各其解ヲ書シ、其論ヲ書
 メ、之ヲ主司ニ呈ス、他日、諸儒ヲメ其甲乙ヲ評定セシメ、
 上中下三等ヲ分テ、銀及ヒ時服ヲ與テ之ヲ賞ス、四歳コ
 トニ一試ス、○是月家齊吹上廳ニ於テ、諸士ノ武技ヲ觀
 ル、各賞賜アリ、○五年二月、前大納言中山愛親、前大納言
 正親町公明、幕府ノ召ヲ以テ江戸ニ至ル、初メ帝所生太
 宰帥典仁親王ヲ尊テ、太上天皇ト為ント欲シ、旨ヲ幕府

ニ傳フ、幕議以為ラク主上統ヲ継キ、固ヨリ父子ノ義タ
 リ、別ニ生父ニ尊号ヲ奉ルノ理アラシヤト、遂ニ二卿ヲ
 召テ之ヲ問フ、三月七日二卿營ニ登ル、既ニ退テ一ハ門
 ヲ閉テ、一ハ出行ヲ禁ス、十日江戸ヲ發メ京ニ歸ル、或ハ
 曰、此日中山大納言、營中ニメ辨論激昂、諸老中辞屈メ對
 ルヲ能ハス、水戸中納言、松平定信、僅カニ之ヲ彌縫ス、然
 レ事聖慮ノ如クナルヲ能ハス、二卿因テ咎ヲ引テ門ヲ
 閉ソト、○是歲、高山彦九郎正之卒ス、正之ハ上野ノ人ナ
 リ、慷慨ニメ奇節アリ、常ニ尊攘ヲ以テ志ト為シ、尤モ皇
 室ノ凌夷ヲ嘆ス、初メ京ニ在リ、中山大納言愛親、其人ト

為リ奇トメ善ク之ヲ遇シ、諸縉紳ノ家ニ出入ス、嘗テ京
郊ヲ過キ、足利尊氏ノ墓ヲ問ヒ、其大逆ノ罪ヲ數テ其碑
ヲ鞭ツ、三百、平安ニ入ル毎ニ三條橋上ニ至テ、遙ニ皇
闕ヲ望テ地上ニ拝跪メ曰、草莽ノ臣、高山茂九郎ト、途人
群笑スレ、正之顧ミス、天明年間、田沼氏、政ヲ天下ニ為シ、風
俗大ニ壞レ、中外愁怨ス、正之涕ヲ拭テ同志ニ謂テ曰、公
上知ル所ナシ、今紙旆ヲ山廟ノ門外ニ樹テ、有志ヲ招
ク、立トコロニ千人ヲ得ヘシ、豎子ヲ梟スレニ於テ何シ
カ有ラン、聞ク者耳ヲ掩フ、正之遂ニ劔ニ伏テ四方ニ周
游シ、豪俊奇傑ノ士ニ交ル、足跡天下ニ徧シ、談南朝ノ事

ニ及フ、片ハ慷慨淋漓、声淚共ニ墮ツ、至ル所人心ヲ激勵
シ、義氣ヲ鼓動ス、皆其至誠ヨリ出ツ、而メ未ク嘗テ一日
モ皇室ヲ忘レス、己ニメ白川侯代テ大政ヲ執リ、弊事悉
ク革ル、正之喜ヒ顔色ニ動ク、後チ鄂羅邊海ヲ窺フト聞
テ意ヲ決メ北游シ、遂ニ海ニ航メ中國ニ達シ、京ニ留ル
一數月、復タ西海ニ游ヒ、居ル一三年、復タ京師ニ歸ル、居
常快々トメ樂マス、是歲筑後ノ久留米ニ至リ、森嘉膳カ
家ヲ主トス、一日憤氣滿面、其日乘ヲ出メ之ヲ寸裂シ、遂
ニ刀ヲ拔テ腹ヲ屠ス、嘉膳驚テ故ヲ問フ、正之曰、吾レ國
家ニ報ヒツト欲シ、自ラ以テ忠ト為シ、義ト為ス所ノ者、

今又テ不忠不義ノ事トナレリ、是レ天吾ヲ殺スナリ、嘉
 膳治ヲ加ヘント請フ、正之聴カス、嘉膳曰、然ラハ則チ官
 ニ告テ驗視セン、否ラサレハ吾法ニ違フノ罪アリ、子且
 ツ殊スルヲ勿レ、正之曰、諾、談笑平生ノ如ク、京師ノ方ヲ
 問ヒ、手ヲ拍テ再拜ス、吏來テ之ヲ檢シ、且故ヲ問フ、正之
 曰、狂發スルノミト、復タ答ヘス、曉ニ及テ遂ニ死ス、死ニ
 臨テ曰、我カ為ニ天下ノ豪傑ニ謝セヨ、久留米侯之ヲ憐
 ニ府下ノ遍照院ニ葬リ、之ヲ其郷里ニ告ク、正之既ニ死
 シ世其故ヲ知ル者ナシ、後チ数月其墓前ニ自尽スル者
 アリ、容貌魁偉蓋シ唐崎常陸介ナリ、唐崎モ亦慷慨ノ士

ナリ、正之初、其名ヲ聞テ、未タ其面ヲ識ラス、一日聖護
 院法親王ニ詣ル、一士人ノ状良非常ナルヲ見ル、正之ヲ
 視テ曰、君ハ高山殿ニ非スヤ、正之曰、君ハ唐崎殿カ、因テ
 手ヲ執テ泣テ曰、天下ノ事、何ソ此ニ至ルヤト、終ニ交フ
 定ム、是ニ至テ唐崎モ亦タ感スル所ナルナリ、同時ニ蒲
 生秀實アリ、君平ト称シ、正之ト志趣ヲ同フス、天明季年、
 正之カ北游ヲ聞キ、追テ陸奥ノ石巻ニ至ル、及ハス、遂
 ニ返ル、終身ノ憾トナス、秀實ハ蒲生氏郷ノ裔ナリ、慷慨
 ニメ大節アリ、常ニ祖先ノ声名ヲ興サント欲シ、憤發書
 ヲ讀ミ章句ヲ治メス、尤モ心ヲ古ノ制度律令ニ留メ、當

世ノ務ニ簡練ス、游ヲ好テ足跡天下ニ半ナリ、京師ニ在
 テ小澤若庵ト善シ、東ニ歸ントス、芦庵離宴ヲ其宅ニ設
 ケ、待テ氏至ラス、日暮ニメ至テ曰、途ニメ東寺ニ過リ、足
 利尊氏ノ像ヲ見テ憤怒ニ堪ヘス、之ヲ鞭ツテ數百、故ニ
 後ルト、其江戸ニ在テ撰述ヲ事トスルヤ、家甚々貧シ、夜
 ル笛ヲ吹テ按摩ヲ鬻クニ至ル、相識ノ僧アリ嘗テ之ノ
 訪フ、柱ニ倚テ憂色アリ、僧之ヲ問フ、秀實曰、終日食セリ
 ル故ノミ、僧走テ米ヲ買ヒ來リ、炉上之ヲ炊キ、相對ノ外
 虜ノ事ヲ論ス、秀實鍋蓋ノ上ニ就テ、形勢ヲ指畫シ、議論
 勃々トメ已ラス、飯ノ既ニ集ル、ヲ知ラス、其貧ヲ以テ

心ヲ屈セリル、此ノ如シ、文化丁卯ノ歲、北辺警アリ、秀
 實策五篇ヲ作り、不恤緯ト名ツケ、之ヲ執政ニ献ス、報セ
 ラレス、又常憲有徳ノ後、山陵ヲ修メサルヲ慨シ、自ラ其
 地ヲ跋涉メ、古圖舊記ヲ以テ考校シ、山陵志ヲ作テ、之ヲ
 京師及ヒ幕府ニ上ル、有司以為ラク皆布衣ノ議スヘキ
 所ニ非スト、召メ之ヲ詰問ス、秀實乃チ律文ヲ引キ、故事
 ヲ誦メ以テ答フ、論辭激烈、有司其不遜ヲ惡ンテ、之ヲ重
 法ニ所セントス、祭酒林大學頭、素ヨリ其人ト為リヲ知
 ル、因テ謂テ曰、草茅ニ危言ノ士アルハ、國家ノ福ナリ、終
 ニ置テ問ハス、秀實常ニ曰、王室ヲ尊テ以テ名分ヲ明カ

ニシ、諸侯ヲ富マメ以テ邦基ヲ固フシ、祀典ヲ明ラカニ
 メ以テ禮敬ヲ教ヘ、左道ヲ禁メ以テ亂源ヲ塞キ、武事ヲ
 鍊メ以テ寇賊ニ備フ、斯レ吾志ナリ、今書ヲ著ハメ當世
 ノ得失ヲ規ス、又職官志ヲ撰ミ、次テ神祇氏族等ノ志ヲ
 撰テ九志ト為ント欲ス、未タ成ラスノ没ス、年四十六、仙
 臺ノ林子平亦タ時ヲ同フス、子平倜儻ニメ大志アリ、常
 ニ士人ノ宴安ニ憤レ、煖飽自ラ居ルヲ見テ謂ラク、憂有
 ルルハ其用ニ堪ヘスト、於是敝衣糲食、寒暑ヲ避ケス、四
 方ニ登游シ、常ニ高履ヲ跣テ、數百里ヲ跋涉スル、隣里
 ニ往來スルカ如シ、諸國ノ風土民俗、政刑ノ得失、皆諳知

セサルヲ無ク尤モ海防ニ注意ス、於是再ヒ長崎ニ游ヒ、
 外國ノ人ニ接メ、海外ノ情状ヲ問ヒ、歸テ海國兵談ヲ著
 ハス、其意ニ謂ラク、日本橋ヨリ歐羅ハ諸國ニ至ルマテ、
 水路相通ス、彼レ大洋ヲ見ル、平地ノ如クニメ、我レ手
 フ拱メ備ヘ無キハ危シト謂ツ可シ、必ス瀕海衝要ノ地
 ニ砲臺ヲ築キ兵備ヲ設ケ、日本ヲ以テ一大城ト為メ、逸
 ヲ以テ勞ヲ待ツ、庶クハ患ヲ免ル可シト、又謂ラク我カ
 南北ノ諸島委テ、觀ミス、彼レ先ツ之ニ據ルルハ、異日
 ノ大患ナリト、三國通覽ヲ著ハス、二書既ニ梓ニ上ル時
 人謂ラク是レ其事ヲ誇張メ、名ヲ要ムルナリト、幕府亦

タ以為ラク、人心ヲ動カスト、命メ其梓ヲ毀チ、仙臺ニ禁
錮ス、時ニ寛政四年五月ナリ、子平乃チ六無ノ歌ヲ作テ
曰、親モナシ、妻モ子モナシ、板木ナシ、金モナケレト、死タ
クモナシ、自ラ六無齊主人ト号ス、先是大宰帥親王ニ、尊
号ヲ奉ルノ議未タ決セス、物議騷然タリ、子平嘗テ執政
白川侯ニ見ミユ、侯ノ談此事ニ及フ、子平笑テ曰、天朝ノ
幕府ニ於ル、是レ君臣ノ際ニメ、一家ノ事ナリ、憂アルモ
家ヲ失フニ至ラス、異邦ノ事ニ至テハ、外来ノ大盗ノ如
シ、或ハ家ヲ併セテ奪ヒ去ルニ至ルト、其邊防ヲ憂フル
此ノ如シ、初メ子平京師ニ在テ、中山大納言ニ謁ス、公盛

ンニ高山正之カ慷慨流涕ノ状ヲ拈ス、子平曰、彼レ泣癖
アリ、方今昇平ノ世、何ソ泣ヲ用ン、唯憂フ可キ者ハ外寇
ナリト、蒲生秀實モ亦嘗テ子平ヲ訪フ、行装甚タ野ナリ、
子平一見メ嘲テ曰、窮措大何ソ野鄙ナル、秀實怒テ曰、田
舎翁何ソ無状ナル、即時ニ別レ去ル、子平既ニ歿メ、後チ
十餘年、東陸果メ鄂羅ノ憂アリ、秀實其先見ニ服メ、書ヲ
執政ニ上ツテ曰、今日宜ク子平ノ墓ヲ祭テ、其靈魂ニ謝
ス可キナリ、後チ幕議邊防ヲ修ルニ及テ、其言ヲ取ル
有リト云、○五年七月、幕府和學講談所ヲ番町ニ置ク、塙
檢校ノ請ヲ所ナリ、乃チ檢校ニ命メ之ヲ司ラシム、檢校

名ハ保已ホキイ一武藏保已ホキイ村ノ人ナリ、幼ニメ明ヲ失ヒ、萩原宗固ニ從テ學ヒ終ニ大成シ強記博聞、當世匹ナシ、著ハス所ノ群書類聚六百六十餘卷、後世其賜ヲ受ルト多シ、其他椒庭譜略、皇親譜略、螢蠅抄、花咲松等ノ書ヲ著ハス、片山足水ナル者、嘗テ宸翰一紙ヲ秘藏ス、未ニ太上天皇ノ御署アルノ之、何レノ天皇タルヲ知ルト能ハス、諸博識ノ人ニ質スニ、辨スル者ナシ、一日國學ノ諸名士、屋代輪池ノ宅ニ會シ、檢校亦坐ニアリ、談宸翰ノ事ニ及フ、檢校乃チ其御文ヲ讀マシメテ之ヲ聽キ、延禁之闕、宸居無動、姑射之山萬壽不騫カクノ句ニ至テ、手ヲ拍テ曰、了セリ、是

花園天皇ノ宸翰ナリ、天皇ノ位ヲ禪ル、伏見帝猶仙洞ニ在リ、故チ姑射ト稱シ、當時ノ主上ヲ後醍醐天皇 翻 延禁ト稱スレナリト、一坐皆漢服ス、其強記此類ナリ、○九月、魯西亞ノ使者阿陀牟海ニ航メ蝦夷ノ根室ニ來テ、我カ漂民曠吉幸太夫ノ二人ヲ送り歸シ、且互市ヲ乞フ、幕府許サス、乃チ目付石川左近將監村上大學ヲ松前ニ遣テ之ヲ喻ス、○十二年八月、先是松平定信教ヲ奉メ、諸國ノ孝子義僕良民ノ状ヲ徵シ、林信徹、柴野邦彦、尾藤志尹等ニ命メ之ヲ撰次ヒシメ、孝義錄ト名ツク、是ニ至テ成ル凡ソ五十卷、○九月、幕府廣島ノ儒員頼維完、鹿見島ノ儒員赤崎

貞幹ヲ徵メ、經ヲ聖堂ニ講セシム、維完春水ト号シ、貞幹
 海門ト号ス皆當時ノ儒宗タリ維完ノ二弟、維強春風ト
 号シ、維柔杏坪ト号シ皆儒雅ヲ以テ著ハル、○享和元年
 六月、出羽ノ民大ニ蜂起ス、初メ米澤侯、彈正大弼上杉治
 憲、賢明ニメ學ヲ好ミ、細井平洲、瀧鶴臺、蒞井太室、南宮大
 湫等ヲ招テ之ニ師事シ、尤モ平洲ヲ重シシ、延テ國政ヲ
 議シ、舊弊ヲ除キ、新政ヲ施ス、封内大ニ治リ、民皆悦服ス、
 高畑織田左近山形秋元但上ノ山松平山ノ諸民之ヲ羨
 望スルヲ年アリ、是ニ至テ黨ヲ結テ群起シ、其國侯ノ政
 治モ、米澤ニ劾ハンテテ嗽訴ス、平洲尾張人、碩學德行

世ニ盛名アリ、尤モ經濟ニ長ス、同時熊本侯、肥後守細川
 重賢モ、亦タ仁恕ニメ學ヲ好ミ、才文武ヲ兼テ、殊ニ射ヲ
 善ス、堀平太ヲ側陋ニ舉テ、委スルニ國政ヲ以テシ、大ニ
 學校ヲ興メ、文武ヲ合シ、秋山玉山、藪孤山ニ命メ學ヲ督
 之、且國政ニ參與セシメ、吏民化ニ向ヒ、政治ノ美、隣國ノ
 模範トナル、重賢江戸ニ在ルルハ、列侯皆細川先生ト稱
 ム、名イハス、肥後侯靈感ト稱シ、米澤侯鷹山ト稱ム、當時
 國君ノ賢明ヲ舉クレハ、必ス先ツ靈感鷹山ノ二公ヲ稱
 ス、平洲野芹野芹著ハメ、米沢ノ治ヲ述ヘ、龜井道載、肥後物
 語ヲ作テ、熊本ノ政ヲ贊揚ス、○是歲平宜長平宜没ス、宜長承

○光格

十一

居氏鈴居ト号ス、初メ醫ヲ業トシ、後チ賀茂真淵ニ從テ、
 本朝ノ古學ヲ精究シ、中興ノ祖タリ、其著ハス所ノ古事
 紀傳、後生ヲ裨益シ、國體ニ功アル甚々大ナリ、其他ノ著
 書類ル多ク、公卿士民ニテ推服ス、没ス年七十二、後チ平
 田篤胤^{アツタ}アリ、伊吹屋^{イフキヤ}ト号シ、其墓ニ詣リ、誓テ弟子トナリ、
 大ニ其學ヲ開宏ス、篤胤尤モ博洽、窺ハサル所ナク、其志
 ニテ我カ神聖ノ大道ヲ明ニスルニアリ、著書甚々多シ、
 真淵宣長篤胤ヲ三大人ト稱ス、○文化元年九月、魯西亜
 ノ使節、吟^イ咄^ト涅^ト吐^ト長崎ニ來リ、我カ漂民四人ヲ送り返シ、
 書及ヒ方物ヲ出メ、通商セン^トテ乞フ、奉行肥田豊後守

頼常之ヲ江戸ニ報シ、國法ヲ擧テ之ヲ諭メ歸リ去ラシ
 ム、吟咄涅吐敏ニメ機辨アリ、初メ船中ニ在テ疾ヲ得タ
 リ、因テ上陸メ之ヲ療シ、且船ノ破壊ヲ修理セン^トテ請
 フ、時ニ國法洋人ノ上陸ヲ禁ス、衆吏法ヲ守テ聽カス、頼
 常曰、疾有テ療スルヲ許サス、船壞レテ繕フヲ許サス、是
 信義ヲ海外ニ失フナリ、法ヲ犯スノ罪、吾獨リ之ノ受レ
 ト、遂ニ其請ニ從フ、使節感謝メ去ル、頼常狀ヲ幕府ニ上
 テ罪ヲ請フ、執政牧野備前守忠精、曰、遠境ノ奉行、宜ク此
 ノ如クナルヘシト、反テ之ヲ賞ス、○三年三月四日、江戸
 大ニ災シ、市街ノ屋舎延焼スル者、百二十七萬餘、侯伯ノ

邸神祠佛宇二千餘區燒以、死者千二百餘人、幕府米銀
ヲ散メ大ニ之ヲ賑恤ス、○九月魯西亞ノ戰艦蝦夷ニ來
テ、留宇多珂ノ柵ヲ焚キ、戊卒四人ヲ捕ヘ去ル、○四年三
月、松前若狹守章廣罪アリ其封ヲ收ム、因テ南部津輕ノ
二藩ニ命メ、箱館及ヒ蝦夷ノ地ヲ守衛ヒシム、四月魯西
亞ノ賊船復々擇捉ニ寇シ、名蘭穂ヲ焚キ、戊卒三人ヲ捕
ヘ、又舍那ノ柵ヲ焚キ、器械ヲ奪テ去ル、五月復々理伊志
理島ヲ掠メ、捕フル所ノ卒四人ヲ返シ、書ヲ付メ通商互
市ヲ請フ、曰聽カスンハ、大舉メ東西蝦夷ヲ攻ント、幕府
會津仙臺ノ諸藩ニ命メ、蝦夷ノ要害ヲ守ラシム、初メ吟

唱涅吐ノ長崎ヨリ返ルヤ、堪察加ニ至リ其土ノ無頼ヲ
誘テ曰、汝等往テ蝦夷ノ地ヲ乱ス可シ、日本必ス奔命ニ
勞メ互市ヲ許サント、於是賊船數々來テ焚掠ス、當時我
カ國未タ其情ヲ知ラス、大ニ幕議ヲ勞シ、守備ヲ嚴ニス、
明年八月之ヲ罷ム、○五年八月、諸厄利ノ賊船長崎ニ來
リ、即夜ニ小船ヲ以テ港ニ入り、民家ヲ抄掠ス、奉行松平
圖書頭、檄ヲ黒田鍋島ノ二藩ニ飛シ之ヲ燒夷セント欲
ス、兵未タ至ラス、賊船夜ニ乘メ帆ヲ揚テ去ル、於是康英
自ラ處置機ヲ失フノ罪五條ヲ書メ、之ヲ幕府ニ上聞シ、
遂ニ自殺ス、○十二月、幕府南部津輕ノ兩藩ニ命メ、東西

ノ蝦夷ヲ總督セシム。○七年十一月、水戸參議源治紀、上
表メ大日本史ヲ獻ス。綱條ツナガ以來此書ヲ按補シ、此ニ至テ
稍ク成ル。因テ之ヲ鑲版セシメテ請フ。詔メ之ヲ許ス。○
八年三月、朝鮮ノ使者、金履喬等對馬ニ來リ、方物及ヒ書
ヲ幕府ニ呈メ、將軍ノ繼職ヲ賀ス。先是幕府命ヲ宗對馬
守ニ傳ヘテ韓使ノ江戸ニ來ルヲ罷メ、對馬ニ接見セシ
ム。於是韓使對馬ニ止ル。幕府乃チ大膳大夫小笠原忠岡
中務大輔脇坂安董ニ命シ、往テ之ニ接セシム。儒員林大
學頭衡古賀彌助、副トナリ松崎懷堂書記、及リ禮畢テ
客館ニ筆語ス。韓使等大ニ精里懷堂又學術文章佩服シ、

又岡本豊洲ノ詩ヲ賞ス。○九年四月、少將松平定信致仕
ス。先是輔佐及ヒ執政ヲ辞メ、溜詰ト為ル。是ニ至テ致仕
ノ樂翁ト号ス。定信賢德既ニ上下ニ著ハル、舉世倚賴ス。
其致仕ヲ聞テ人皆之ヲ惜ム。國本論、求言錄、集古十種、花
月冊子等ノ書ヲ著ハス。○是歲、江戸ノ儒者山本信有没
ス。信有北山ト号シ、博學ヲ以テ稱セラレ、太田錦城、朝川
善庵等其門ニ出テ、一家ヲ成ス。同時龜田興鵬、齊ト号
シ、詩文及ヒ書ヲ善シ、豪才ヲ以テ著ハル。共ニ著書多シ。
○十年、先是文化八年、魯西亜ノ船將伊理巨留戰艦ヲ以
テ理井尻ニ至リ、八人陸ニ上ル。南部戍兵之ヲ捕フ。次年

八月復々来リ我漂民三人ヲ還シ其八人ヲ還サントヲ
請フ、戌兵肯シセス、是ニ至テ復々松前ノ豪商高田屋全
兵衛ヲ海上ニ要シ、携へ来テ言ハシメテ曰、往歲柄太等
ヲ抄掠スル者ハ、皆堪察如ノ徒ノ為ス所ニメ、吾王ノ知
ル所ニ非ス、我國已ニ彼等ヲ罪メ、貴國ニ入ラシメス、因
テ去年臣等来リ謝ス、然ルニ貴國我カ輩ヲ待スル過嚴
ナリ、請フ他無キヲ察メ、八人ノ俘ヲ賜ヘト、松前奉行報
メ曰、入犯ノ謝書ヲ致シ嚮ニ掠ル所ノ器械ヲ還サハ、八
人ヲ與ヘント、伊理古留大ニ悦テ、器械及ヒ謝書ヲ致ス、
乃チ俘ヲ還シ答書ヲ與フ北邊ノ警始テ止ム、○十三年

十一月、能勢郡野間ノ莊、出野村ニハ幡ノ小祠アリ、相傳
フ壇浦ノ役ニ左少辨經房等、安徳帝ヲ奉メ別船ニ御シ、
源氏ノ圍ミヲ出テ、山陰ニ入り、東ニ走テ此ニ駐リ、京
師ニ入ントス、後鳥羽帝既立ツヲ聞テ止ム、明年帝疾テ
崩ス、經房乃チ廟ヲ建テ、奉祀シ、八幡宮ト稱ス、村民下
辻氏ハ、即チ經房ノ裔ナリト、是月下辻氏屋宇ヲ修理シ、
棟上ノ竹筒中ニ於テ、經房カ遺書ヲ得タリ、填スルニ輕
粉ヲ以テス、其帝ノ事ヲ記載スル土人ノ言フ所ト悉ク
相符ス、未ニ經房以来ノ系ヲ記シ、天正中ニ至テ止ム、盖
シ竹筒ヲ棟ニ納レテヨリ、之ヲ記セサルナリ、能勢氏之

ヲ松平樂翁ニ呈ス、樂翁之ヲ奇トシ、人ヲメ鑒セシムル
ニ、皆曰六百年前ノ古紙ナリト、樂翁大ニ感賞シ、自ラ其
外函ニ題署メ、永ク之ヲ寶藏セシム、按スルニ壇浦ノ役
ニ、源氏ノ兵、平太后ヲ救ヒ、宗盛父子ヲ搭メ獲タリ、豈ニ
天皇ヲ奉救スルノ暇ナカラシヤ、而メ其事ナキ者ハ、天
皇此ニ在ラサルヲ以テナリ、開田耕筆ニ曰、緒方三郎維
義ハ、平氏ノ純臣ナリ、平軍ノ終ニ勝ツ可ラサルヲ料テ、
陽ハニ源氏ニ降り、陰カニ天皇及ヒ諸臣ヲメ、肥後ノ五
箇村ニ遁レシム、戰破ル、ニ及テ海ニ投スル者、多クハ
其形ヲ偽ハル者ナリ、伊達泰衡カ頼朝ノ言ニ從テ、衣川

十一月、能勢郡野間ノ莊、出野村ニ八幡ノ小祠ナリ、相傳
フ壇浦ノ役ニ左少辨經房等、安徳帝ヲ奉メ別船ニ御シ、
源氏ノ圍ミヲ出テ、山陰ニ入り、東ニ走テ此ニ駐リ、京
師ニ入ントス、後鳥羽帝既立ツヲ聞テ止ム、明年帝疾テ
崩ス、經房乃チ廟ヲ建テ、奉祀シ、八幡宮ト稱ス、村民下
辻氏ハ、即チ經房ノ裔ナリト、是月下辻氏屋宇ヲ修理シ、
棟上ノ竹筒中ニ於テ、經房カ遺書ヲ得タリ、填スルニ輕
粉ヲ以テス、其帝ノ事ヲ記載スル土人ノ言ヲ所ト悉ク
相符ス、未ニ經房以來ノ系ヲ記シ、天正中ニ至テ止ム、盖
シ竹筒ノ棟ニ納レテヨリ、之ヲ記セサルナリ、能勢氏之

ヲ松平樂翁ニ呈ス、樂翁之ヲ奇トシ、人ヲメ鑒セシムル
ニ、皆曰六百年前ノ古紙ナリト、樂翁大ニ感賞シ、自ラ其
外函ニ題署メ、永ク之ヲ寶藏セシム、按スルニ壇浦ノ役
ニ、源氏ノ兵、平太后ヲ救ヒ、宗盛父子ヲ搭メ獲タリ、豈ニ
天皇ヲ奉救スルノ暇ナカラシヤ、而メ其事ナキ者ハ、天
皇此ニ在ラサルヲ以テナリ、閑田耕筆ニ曰、緒方三郎維
義ハ、平氏ノ純臣ナリ、平軍ノ終ニ勝ツ可ラサルヲ料テ、
陽ハニ源氏ニ降り、陰カニ天皇及ヒ諸臣ヲメ、肥後ノ五
箇村ニ遁レシム、戰破ル、ニ及テ海ニ投スル者、多クハ
其形ヲ偽ハル者ナリ、伊達恭衡カ頼朝ノ言ニ從テ、衣川

ノ館ヲ襲ヒ潜カニ義經ヲ蝦夷ニ脱スルト、同一策ナリ
ト、彼是ヲ參考スルルハ、安徳天皇ノ壇浦ニ崩セサルヤ
昭然タリ、我カ國體ノ正シキ、神裔ノ尊キ、彼ノ崖山魚腹
ト、日ヲ同フメ語ル可ラ、○十四年三月、天皇位ヲ皇太
子ニ禪ル、天保十一年、十一月十九日崩ス、壽七十、天皇聰
明ニマ學ヲ好シ、典故ノ精究ス、宮殿ノ制ヲ正シ、祭儀ヲ
復シ、廢官數百員ヲ復シ、殊ニ和歌ニ妙ナリ、其神儒佛ノ
御製、天下ニテ感誦ス、神ノ歌ニ曰、八重雲ニ佛ヲ科戸ノ
秋風ニ、高天ノ原ノ月ソサヤケキ、儒ノ歌ニ曰、色ソ濃キ
唐紅ニ染テコソ、大和錦ノ最モハエアレ、佛ノ歌ニ曰、世

ノ中ニカキノ蓮ノ花ノミソ、有リテ空シキ教ナリケル、
天皇諸皇子皇女ヲ最ルニ皆讀書ヲ以テス、故ニ東宮博
覽經史ニ涉リ、皇女ト亦然リ、

○仁孝天皇 諱ハ惠仁

光格天皇第四ノ皇子ナリ、母ハ東京極院、藤原氏○三月
天皇踐祚ス、關白忠良故ノ如シ、九月即位ノ禮ヲ行フ、年
十八、將軍、讚岐守松平頼儀等ヲ遣テ、即位ヲ賀ス、○文政
元年、村瀬之熙没ス、之熙、携亭ト号ス、京師ノ人、秋田ノ文
學ヲリ、博洽ニメ文ヲ善クス、盛名皆川淇園ニ次ク、頼山
陽嘗テ曰、淇園ノ書ハ奔逸、故ニ人々之ヲ稱ス、携亭ノ書ハ

善ク東坡ヲ學テ謹嚴故ニ著ハレス、文章ノ優劣ニ至テ
ハ、携亭ノ文、淇園ニ駕ヲ上ルヲ幾等、○五年二月、詔メ大
將軍ヲ以テ左大臣ト為シ、世子家慶ヲ内大臣ト為ス、大
將軍ノ夫人、島津氏ヲ從ニ位ニ叙シ、世子ノ夫人、鷹司氏
ヲ從ニ位ニ叙ス、大猷以來、左大臣ニ任スル者ナシ、在職
ノ久シキ以テ之ヲ進ム、世子ノ大臣ニ任スル者、鎌倉以
來ノ無キ所ナリ、○六月、清人徐稼圃長崎ニ來リ、村瀬之
熙カ藝苑日鈔、太田元貞カ九經談、多紀元簡カ醫牘ヲ求
ム、稼圃墨梅ニ巧ナリ、元貞錦城ト号シ、經學ヲ以テ著ハ
ル、元簡桂山ト号シ、該博ニシテ醫ヲ善クス、○八月、相馬大

作、關良助、津輕越中守寧親ヲ怒ムリ、出羽ノ白沢驛ニ於テ之ヲ銃セン。謀ル、事露ハレ、幕府捕ヘテ之ヲ誅ス。○七年九月、上皇修學院ニ幸メ、紅葉ヲ觀ル、群臣ニ命メ、詩歌ヲ賦セシム、將軍其儀伏ノ美ナルヲ聞キ、京師ノ画入ニ命シ、之ヲ圖セシメテ拝覽ス、行幸ハ將軍ノ奏請スル所ナリ。○九年、大舍人源松苗國史略ヲ修メテ成ル。○十年三月、詔メ將軍家齊ヲ以テ太政大臣ト為ス、其四十年職ニ在テ、勤勞スルヲ賞スルナリ、將軍固辭スレヒ命ヲ得ス、世子家慶ヲ從一位ニ叙ス。○十二年三月廿一日、江戸大ニ災ス、疾師街舎延焼スル者十一萬八千、焚

死スル者十九百余人。○天保二年、幕府安治川ヲ濬ス、大坂ノ庶民争テ役ヲ奉シ、其土ヲ集テ一阜ヲ海口ニ造リ、天保山ト名ツク。○水戸藩ノ史臣青山延子皇朝史略ヲ著ハメ成ル、川口長孺征韓偉略ヲ著ハス。○三年九月、賴襄歿ス、襄字ハ子成、山陽ト号ス、春水ノ子ナリ、學殖文章、當世ニ冠タリ、古賀穀堂其文才ヲ稱メ、天下第一ト為ス、少將樂翁嘗テ其著ハス所ノ日本外史ヲ請テ之ヲ觀、大ニ其史筆ヲ賞ス、山陽波々未タ數年ナラス、外史政記等ノ書、盛シニ世ニ行ハレ、世道人心ニ功アル甚ク大ナリ。○六年十二月、幕府仙石道之助久利カ封ヲ削リ、其老仙

石左京等ヲ誅ス、初ノ左京庶子ニメ且慧ナルヲ以テ、播磨守久道ニ僱用セラル、已ニメ久道ノ子、讃岐守政美率シ、幼子久利嗣テ立ツ、左京稍ク驕恣、其幼主ヲ蔑シ、獨リ國事ヲ專ニシ、遂ニ已レカ子小太郎ヲ以テ、久利ニ代シ、ト欲ス、岩田静馬、宇野甚助等狡奸ヲ以テ左京ニ阿附シ、密カニ謀テ醫已伯ニ命シ、毒ヲ鉛ニ置テ久道ヲ殺シ、已レニ異ナル者ハ、皆誣構メ之ヲ罪ス、獨リ河野瀬兵衛、及ヒ江戸ノ郵吏神谷轉之ニ附カス、且密謀ヲ知ル、因テ瀬兵衛ヲ讒構メ之ヲ斬リ、國事ニ託メ轉ヲ江戸ヨリ召ス、轉其意ヲ悟リ、禍ニ及ンヲ恐レ、郵ヲ脱メ、普化寺ニ入

リ、名ヲ交鷲ト改ム、左京潜カニ人ヲ遣テ之ヲ捕ヘシム獲ス、大ニ懼レ、遂ニ江戸ノ町奉行、筒井伊賀守ニ請テ、之ヲ捕フ、轉其聽ニ至テ、冤ヲ訴ヘ、且左京等カ逆状ヲ陳ス、具サニ證左アリ、因テ之ヲ寺社奉行ノ聽ニ送ル、時ニ中務太輔脇坂宗董奉行タリ、明斷ヲ以テ稱セラル、乃チ轉ヲ召テ状ヲ訊ヒ、尽ク其情ヲ得タリ、速カニ左京等十餘人ヲ江戸ニ檻送シ、之ヲ鞫訊メ、皆罪ニ伏ス、乃チ左京ヲ梟シ、静馬甚助ヲ斬リ、毒ヲ置クノ醫ヲ出石ニ磔シ、其餘ハ流放ニ處ス、濱田彦松、平周防守康任、左京カ姻戚タリ、坐メ老中ヲ免ス、松平主税、曾我豊後守等、亦罪ヲ獲タリ、

○七年三月ヨリ十月ニ至ルマテ、天下淫雨多ク、六月冷寒、綿衣ヲ著ク、天下大ニ飢ニ、餓莩路ニ滿リ、幕府京師及ヒ江戸ノ飢民ヲ賑ス、諸國ノ豪民、亦倉ヲ開テ賑救スル者甚ク多シ、天皇奉幣使ヲ伊勢ニ遣テ、年ヲ大朝ニ祈ル、○八年二月十九日、大坂町奉行ノ属吏、大塩平八郎、其子格之助等乱ヲ作ス、初メ平八郎、米價踊貴メ、窮民ノ益々困スルヲ患ヘ、自ラ書籍什器ヲ鬻テ、窮民ヲ賑恤シ、數々奉行ニ説テ、大ニ賑救センコトヲ請フ、奉行等應セス、平八郎憤慨ニ堪ヘス、同僚瀬田濟之助、庄司儀左衛門、近藤梶五郎、渡邊良右衛門等十餘人ト、密カニ謀テ黨ヲ集メ、檄

ヲ作テ攝河泉ノ飢民ヲ煽動シ、此日拂曉銃ヲ發シ、火ヲ縱テ、天満市民ノ宅ヲ燒キ、旗幟ヲ建テ救民ト稱シ、其黨凡五百人、進テ奉行ノ廳ニ逼ル、期ニ先タツコト一日、其黨奉行ノ宅ニ至テ自首スル者アリ、城代大炊頭土井利位、急ニ近國ノ諸侯ニ檄メ、援兵ヲ出サシメ、町奉行、跡部山城守良弼、堀伊賀守利堅ト、俄カニ守備ヲ修メ、天満天神ノ二橋ヲ撤メ之ヲ待ツ、賊至テ渡ルコトヲ得ス、乃チ轉メ難波橋ヲ渡リ、隊ヲ分ツテ二ト為シ、火箭ヲ發メ、火ヲ放ツコト益々急ナリ、烟焰空ニ漲リ、市民驚走ス、尼崎郡山岸和田等ノ諸藩、皆變ヲ聞テ兵ヲ出ス、二十日、玉造ノ成遠

藤但馬守胤統ノ部屬山崎彌四郎坂本鉉之助本多為助
等三十餘人各銃ヲ携ヘ跡部良弼ノ隊ト共ニ賊ヲ蹤メ
進ミ一隊ヲ平野街ニ破リ又一隊ニ淡路街ニ逢フ相距
ル一町鉉之助進テ賊ノ隊長梅田某ヲ銃メ之ヲ斃シ
賊ノ發スル所ノ丸其陣笠ニ中ル賊皆驚キ散メ迹無シ
大坂ノ街舎延焼スル者一萬八千二百餘戸廿一日火熄
ム既ニメ賊ノ渠帥或ハ橋ニ就キ或ハ自殺ス三月廿七
日入アリ城代ニ告テ曰平八郎父子油掛町五郎兵衛力
宅ニ匿ルト乃チ吏卒ヲ遣テ之ヲ圍ム父子火ヲ放テ自
殺ス明年黨與數人ヲ誅シ餘黨悉ク平反ス坂本鉉之助

ヲ賞メ白金及ヒ平八郎力用ル所ノ大銃ヲ賜ハ其餘賞
賜差アリ初ノ平八郎學ヲ好テ聲望アリ王陽明ノ説ヲ
信シ自ラ視ルト甚タ高ク諸奉行皆其倔強ニメ御シ難
キヲ苦シム獨リ矢部駿河守ノ奉行タル鉉之助ヲ控御
シ平八郎モ亦其材用ヲ展フト云○四月大將軍職ヲ辞
シ世子内大臣家慶職ヲ嗣ク○八月詔メ内大臣家慶ヲ
以テ征夷大將軍ト為ス○九年三月江戸ノ西城災アリ
諸侯ニ課メ又之ヲ築ク明年四月成ル○十一年十一月
先是天皇朝覲ヲ欲シ費用ヲ幕府ニ徵ス幕府金一萬兩
ヲ獻ス是月朝覲ノ禮ヲ行ハントス上皇崩スルニ遇テ

果サス、朝野之ヲ惜ム。○十二年閏正月、前大將軍家齊薨ス、年六十九、文恭ト謚ス。○是月廿七日、公卿三人ヲ泉涌寺ニ遣テ、光格天皇ノ謚号ヲ上皇ニ奉ス、宇多天皇謚法ヲ停メテヨリ、此典廢スル者、六十代ナリ、是ニ至テ之ヲ復ス。○十二年十月、幕府天下ニ令メ奢靡ノ器什、及衣帶、笄簪ヲ用ルルヲ禁ス、劇場ヲ淺草聖天町ニ移シ、俳優ノ徒、出行スルニ必ス蓑笠ヲ被ラシム。○十三年、幕府諸商ノ社ヲ結フヲ禁シ、又米油薪炭塩醬餅菓、販賣ノ法ヲ定メ、物價ヲ平ラカニス、婚葬飲膳、僕從雜役ノ類皆制アリ、又市上鬻ク所ノ繪画冊子、及ヒ童兒ノ玩器泥塑紙鳶

ニ至ルマテ、五彩ヲ施スヲ禁ス、時ニ越前守水野忠邦政ヲ執リ、白川侯ノ政蹟、漸ク弛ムルヲ慨シ、屢々節儉質素ノ令ヲ下シ、奢靡豪華ノ俗ヲ以テ、遽カニ之ヲ寛政ノ舊ニ復セント欲ス、故ニ徃々人ノ耳目ヲ驚カシ、且其政令煩苛ニメ、下ニ便ナラサル者亦多ク、衆心服セス、尋テ印幡湖ヲ疏メ、之ヲ裏海ニ通セント欲シ、諸侯ニ課メ役ヲ助ク、役既ニ興ル、衆議益々囂然タリ、○三月江戸ノ町奉行、矢部駿河守、罪アリ伊勢桑名ニ拘セラル、駿河守桑名ニ在テ、憤惋ニ堪ヘス、遂ニ食ヲ絶ツテ死ス、幕府其疾篤シト聞テ、醫官某ヲ遣テ之ヲ視セシム、駿河守惟

悴骨立、其ニ謂ラ曰、吾固ヨリ死ヲ決ス、何ソ藥餌ヲ用ヒ
ニ、唯吾二月廿一日ヲ以テ罪ヲ獲タリ、吾カ罪ヲ得ルノ
日ヲ以テ、吾ヲ構陷スル者ニ報セントス、君幸ヒニ之ヲ
記セヨト、幾クモ無メ歿ス、後ヲ弘化二年三月、水野越前
守、鳥居甲斐守、神原主計頭等、果メ其廿一日ヲ以テ、罪露
ハレテ歿セラレ、其正月廿一日、矢部鶴松ヲ召メ俸ヲ與
ヘ家ヲ復ス、○八月、幕府朝川鼎カス、松崎懺堂ヲ召メ見ル、鼎
字ハ五鼎善庵ト号シ、懺堂ト共ニ經術篤行ヲ以テ、一代
ノ名儒タリ、○十月、先是幕府勘定奉行ノ屬吏、市野茂三
郎等數人ヲ遣テ、諸國ノ田地ヲ打量ヒシム、既ニ北陸ヲ

丈量シ、是月近江ニ入り、三上村ニ館ス、諸村ノ民之ヲ聞
テ、黨ヲ結テ群起シ、鐘鼓ヲ擊テ竹槍ヲ携ヘ、進テ其館ニ
逼ル、凡ソ一萬餘人、沸聲雷ヲ成ス、茂三郎驚テ遠藤氏ノ
縣廳ニ逃ル、諸吏ハ走テ三上山ニ入ル、群民山ヲ焚ント
欲シ、或ハ旅館ニ入テ、帳簿ヲ乱棄シ、箱櫃ヲ打壞ス、遠藤
氏ノ吏出テ、之ヲ諭ス、群民打量ヲ停メントテ乞ヒ、且
再ヒ此郡ニ入ラサルノ證書ヲ請フ、茂三郎已ムトテ得
スメ其書ヲ與テ、衆乃チ退キ去ル、後チ幕府其魁ヲ捕ヘ
テ之ヲ誅ス、然レ打量ノ事終ニ止ム、○十四年四月、將軍
家慶日光廟ニ詣ル、○五月十八日、將軍水戸中納言齊昭

ヲ召テ其國ニ就テヨリ、封内化ニ嚮ヒ、政治徳教ノ美、義
公ノ遺志ヲ繼ク、一ヲ賞シ、賜フニ黄金百枚、馬鞍ヲ以テ
シ、將軍手ツカラ色清ノ寶刀ヲ賜フ、蓋シ齊昭封ヲ嗣テ
ヨリ、弊政ヲ革メ奢侈ヲ禁シ、節儉ヲ勤メ、國內大ニ化ス、
幕府ノ改政ニ先、タツテ十餘年、時人或ハ曰、幕府ノ政治、
水戸ニ例フナリト、○六月幕府命メ下総ノ印幡湖ヲ疏
鑿シ、水路ヲ品川ノ海ニ通セントス、松平因幡守、酒井左
衛門尉、黒田甲斐守、水野出羽守、林播磨守等ニ命メ、其役
ヲ助ケシム、閏九月ニ至テ、遂ニ其役ヲ罷ム、○七月幕府
大坂ノ巨商ニ課メ金ヲ納メシム、國用足ラサルヲ以テ

ナリ、息ヲ如ヘ、廿年ヲ以テ之ヲ償ハント、○十一月江戸
ノ画人谷文晁没ス、初ノ画ヲ如藤文麗ニ學ヒ、後チ元人
ニ法ツテ一家ヲ成ス、近世ノ巨擘ナリ、文麗伊賀守ニ任
ス幕府ノ世臣○弘化元年五月、幕府水戸中納言齊昭ヲ
退隱セシメ、之ヲ駒込邸ニ幽ス、先是中納言大ニ國政ヲ
修メ、藤田虎之助、戸田銀次郎、武田彦九郎等ヲ擢用メ、國
政ニ參與シ、弘道館ヲ起メ文武ヲ振興シ、奢ヲ抑ヘ儉ヲ
尚ヒ、郡吏村正ニ至ルマテ、彬々化ニ嚮フ、尤モ心ヲ海防
ニ留メ、其史臣會澤恒蔵カ著ハス所ノ新論ヲ採リ、大砲
ヲ鑄礮臺ヲ築キ、春秋追鳥狩ヲ為メ兵馬ヲ操練ス、兵士

數万人甲冑ヲ着ケ旌旗ヲ列ス、升平日久シク、人始テ軍
装ヲ目ニス、期ニ至テ四方来リ觀ル者雲ノ如ク、其金鼓
節制ノ嚴、銃礮轟發ノ快ヲ見テ、皆嘆美セラル、無ク、天
下噴々トメ之ヲ稱ス、是ニ至テ幕府其異志アルカト疑
ヒ、俄カニ之ヲ江戸ニ召シ、責ルニ驕慢日ニ長シ、恣ニ制
度ヲ改ルノ事ヲ以テメ、之ヲ駒込邸ニ幽ス、藤田以下國
事ニ關スル者皆幽セラレ、舉藩愕然、人心大ニ動ク、或ハ
云、奸人アリ之ヲ讒構スト、○此月十日江戸大城災アリ、
幕府舊ニ依テ金ヲ諸侯ニ課ス、碁局ノ僧井上因碩、上書
メ曰、方今天下節儉ノ名有テ、富强ノ實無ク、列侯ノ疲弊

極レリ假令ヒ命ヲ奉メ資ヲ獻スルモ、其封内農商ノ金
ヲ括スルニ過サルノミ、天下ノ膏血ヲ以テ、修築ノ用ニ
供ス、恐クハ盛徳ノ事ニ非ス、宜ク大坂ノ豪商ニ課スル
所ト、府下市民ノ獻スル所ヲ以テ、假ニ之ヲ築キ、一切諸
侯ノ課金ヲ停ムヘシ、示スニ茅茨土階ノ儉ヲ以テスル
所ハ、必ス庶民子来ノ時アラント、諸執政之ヲ嘉納シ、遂
ニ課金ヲ減ス、因碩學ヲ好ミ、唯ニ圍碁ニ妙ナルノミナ
ラス、同時林允美亦タ然リ、○六月、和蘭ノ使者戰艦一隻
ヲ以テ長崎ニ来リ、國書ヲ幕府ニ呈メ曰、西洋同盟ノ諸
國我カ邦ヲ覬覦ス、或ハ来リ犯ス、有ント、○二年二月

廿一日、水野越前守、堀大和守罪アリ、老中ヲ免メ屏居ス、
市民數百人、夜ル忠邦ノ邸ニ至テ、瓦礫ヲ抛ノリ雨ノ如
ク、近傍ノ邸皆吏卒ヲ出メ之ヲ制ス、後チ其封ニ萬石ヲ
削リ出羽ノ山形ニ遷ス、大和守ノ封一萬石ヲ削ル、又鳥
居甲斐守、神原主計頭罪アリ、甲斐ヲ籍没シ、相良壹波守
ノ邸ニ拘ス、神原モ亦籍没セラレ、其餘連坐メ罰セラレ
、者數十人、○十二月、先是將軍家齊奏メ、諸播紳ノ為ニ
學舎ヲ建春門ノ前ニ建ツ、是ニ至テ成ル天皇之ヲ嘉メ、
名ヲ學習院ト賜フ、家齊十三經及ヒ歴史ノ諸書ヲ納ル
○三年正月廿六日、天皇崩ス、壽四十七、天皇孝順ニメ學

ヲ好ミ、尤モ和歌ニ巧ノリ、光格帝ノ疾アル、天皇女與ニ
御シ、潜カニ宮ヲ出テ、朝覲ス、

○孝明天皇 諱ハ統仁

仁孝天皇第四ノ皇子ナリ、母ハ新待賢門院藤原氏、○正
月天皇踐祚ス、年十六、左大臣政通關白タリ、明年九月即
位ノ禮ヲ行ス、將軍少將出羽守松平齊貴等ヲ遣リ、世子
右大將家定、大膳大夫武田信典ヲ遣テ即位ヲ賀ス、○八
月初ノ長崎人本庄茂平次ナル者、高島四郎太夫ノ事
ニ關係シ、罪ヲ獲テ江戸ニ來リ、名ヲ辰輔ト改メ、鳥居甲
斐守ノ臣トナリ、長崎ノ吏人私曲ノ状ヲ陳ス、鳥居時ニ

目付タリ、大ニ之ヲ親任ス、町奉行タルニ及テ、老中水野
忠邦ニ親近シ、シテ欲シ之ヲ辰輔ニ謀ル、辰輔元ヨリ
奸ニメ黠智アリ、啓カニ謂テ曰、武州大井村ノ修驗了善、
祈禳ヲ善スルヲ以テ著ハル、僕潜カニ往テ其弟子トテ
リ、利ヲ啗ハシメテ非常ノ祈禳ヲ行ハシ、君困テ了善ト
僕トヲ捕ヘヨ、鞫問ニ臨テ僕之ヲ證セン、君乃チ祈禳ノ
秘迹ヲ以テ密カニ之ヲ水野氏ニ陳スル、水野氏必
ス其發擿ノ功ヲ賞セント、鳥居喜ンテ其計ニ從テ、忠邦
果ノ之ヲ親近シ、大ニ任用セラレ、辰輔曾テ詭秘ノ計ヲ
以テ、其所親井上傳兵衛徒士ニ問フ、井上劔法ヲ善クシ、

人ト為リ剛直之ヲ聞テ大ニ辰輔ヲ規諫ス、辰輔其計ノ
洩レシトテ恐レ、遂ニ井上ヲ下谷御成巷ニ暗殺ス、時ニ
天保九年二月ナリ、井上ノ弟、熊倉傳之丞、松平隠岐守ノ
臣タリ、之ヲ聞キ其仇ヲ復セント欲メ仕籍ヲ脱ス、其子
傳十郎亦タ父ヲ援ケント欲メ之ニ從テ、然レ未タ仇人
ノ誰タルヲ審カニセス、已ニメ傳之丞心ヲ竭メ探偵シ、
終ニ辰輔カ所為タルヲ確知ス、辰輔之ヲ悟リ、亦傳之
丞ヲ誘殺ス、是十津川ノ人小松典膳、劔法ヲ井上ニ學
ス、亦タ師ノ仇ヲ報セントメ江戸ニ来リ、カヲ傳十郎ニ
協セ、共ニ辰輔ヲ蹤跡ス、辰輔既ニ傳之丞ヲ殺シ、鳥井ヲ

辞ノ潜カニ長崎ニ往キ其舊識ノ家ニ潜匿ス故ヲ以テ
二人其所在ヲ知ラサル者數年鳥井罪ヲ蒙リ廢錮セラ
ルニ及テ幕府辰輔ヲ捕ヘテ江戸ノ獄ニ逮ス二人大
ニ喜テ其罪ノ定ルヲ待ツ此月六日辰輔放逐ノ譴ヲ蒙
リ板輿ヲ以テ評定廳ヲ出ツ二人之ヲ一橋門外ニ待テ
輿中ヨリ曳キ出メ呼テ曰父及ヒ伯父ノ仇ヲ報ス曰師
ノ仇ヲ報ス辰輔驚顔土ノ如ク一語ヲ出サス二人左右
ヨリ之ヲ斬テ其喉ヲ刺ス府下ノ人辰輔ヲ惡シ陰カニ
復仇ノ舉ヲ助クル者多シト云○十月天皇詔メ經史數
十部ヲ學習院ニ賜テ關白政通モ亦和漢ノ史籍ヲ納ム

○四年三月天皇又學習院ニ經解數部ヲ賜ヒ九日ヲ以
テ開講セシム○此月廿四日信州地大ニ震シ松代松本
須坂飯田高遠小諸等尤モ甚シ時ニ善光寺ノ間龜ニ厲
シ遠近來リ賽スル者甚々多ク墜死三千餘人幕府松代
以下ノ諸藩ニ金ヲ貸メ之ヲ賑救ス○嘉永二年三月將
軍大ニ小金原ニ獵メ以テ武ヲ講ス老中阿部伊勢守正
弘ヲ中營ニ召メ陣禮ヲ賜フ其指揮宜キヲ得ルヲ賞ス
ルナリ○七月先是外國ノ舩松前對馬浦賀下田大島等
ニ至リ或ハ上陸シ或ハ薪水ヲ乞フ者數々幕府瀕海ノ
諸藩ニ令メ益々守備ヲ修ノシム是月又五島左衛門尉

盛成、松前伊豆守為吉ニ命メ、新夕ニ城ヲ海瀕要害ノ地ニ築テ、以テ守備ヲ嚴ニセシム。○秋幕府諸藩ニ令メ、益々兵士ヲ操練シ、火技ヲ講習シ、緩急變ニ應メ、專ラ實用ニ供セシム。○三年五月、幕府ニ水松ノ臣、安積祐助ヲ徵メ、儒員ト為ス、祐助良齊ト号シ、學術文章、佐藤一齊ニ繼テ、林門ノ巨擘タリ。○八月八日、江戸大雷終夜、四十餘所ニ震ス、近古未タ有ラサル所ナリ。○四年三月十五日、詔メ、和氣清磨呂ニ正一位ヲ贈リ、益メ護王大明神ト曰ス、勅使高雄ノ神護寺ノ廟ニ就テ命ヲ宣フ。○十二月、將軍塙次郎、前田鏖助ヲ召シ見ル、共ニ國學ニ精キヲ以テテ

リ、次郎ハ保己一ノ男ナリ。○五年五月、江戸西城災ス、明年諸藩ニ課メ之ヲ築ク。○十一月、先是幕府朝鮮ノ聘使ヲ大坂ニ接見セントシ、命ヲ宗對馬守ニ傳ヘテ彼國ニ報セシム、是ニ至テ西城災シ、諸國水旱ノ患アルヲ以テ、其期ヲ延フ、對馬守之ヲ朝鮮ニ告ク。○六年四月、加賀ノ豪商、錢屋五郎兵衛罪アリ刑セラル、宮腰浦ニ方七里ノ湖アリ、五郎兵衛建議シ之ヲ涸メ、田ト為ント欲ス、近村ノ民漁網ノ利ヲ失フ患ヘテ、之ヲ拒ム、五郎兵衛密カニ毒ヲ湖中ニ撒セシム、魚ヲ食フ者皆疾シ、村民大ニ困ス、又加賀族ノ命ト偽リ、奥州ノ山林ヲ購フ、林ニ巨材多ク、

密ニ其利ヲ恣ニス、商肆ヲ秋田弘前ニ置キ、商舶ヲ遣テ
外國ト貿易シ、富巨萬ニ至ル、是ニ至テ事露ハレ、其田宅
ヲ籍メ之ヲ磔ス、金澤ノ臣篠原主殿、篠原主膳等十一人、
連坐ノ自殺ス、○六月三日、米利堅ノ兵艦四艘突然トメ
浦賀ニ来ル、先是来ル者ハ漁船商舶ノミ、兵艦ハ此ヲ始
ト為ス、於是諸鎮相警シ、浦賀奉行、戸田伊豆守氏榮、屬吏
四人ニ命シ、硝船ニ乘メ行テ其来意ヲ問ハシム、使節、
理曰、國命ヲ奉メ特ニ来リ、通商盟約ヲ請フ、國書アリ之
ヲ江戸府ニ呈ヒシ、屬吏等旧例ヲ擧タテ、長崎ニ於テ接
ヒント欲ス使節聽カス、其狀頗ル強暴ナリ、奉行書ヲ飛

メ幕府ニ報ス、幕府憂テ生センコトヲ慮リ、先ツ諸侯伯ニ
命メ、近海及ヒ伊豆相摸安房上総ノ衝要ヲ分テ衛ラシ
ム、諸藩ノ兵皆旌旗ヲ建テ礮車ヲ送ル、上下駭然タリ、居
ルコト五日、幕議未タ決セス、物議紛興ス、九日終ニ假館ヲ
栗濱ニ設テ、戸田伊豆守氏榮、井戸對馬守弘道等、諸吏ヲ
率テ陂理ニ接シテ國書ヲ受ク、陂理洋帛洋酒及ヒ諸珍
器ヲ献ス、十一日、幕府又二人ヲメ陂理ニ言ハシメテ曰、
事ヲ天朝ニ奏シ、衆議ヲ竭メ、而メ復書セント、陂理乃チ
明年ノ再航ヲ約シテ退キ去ル、諸藩ノ兵解嚴ス、水戸中
納言齊昭ヲ召テ幕議ニ參セシメ、即日使ヲ馳テ之ヲ京

師ニ奏ス天皇之ヲ憂ヘ七廟ノ神官ニ命メ海内無事ヲ
祈ラシム○七月幕府米國ノ書翰ヲ譯メ侯伯及ヒ麾下
ニ示シ其利害ヲ陳セシム或ハ戰ト云ヒ或ハ和ト云フ
衆議紛然而ノ諸藩文武ノ士材略アル者争テ其論策ヲ
献シ海防ノ書紛然トノ雜出ス田夫野老ニ至ルマテ邊
防ヲ口ニセサル者ナシ○是月征夷大將軍源家慶薨ス
贈官前代ノ如ク慎徳ト謚ス世子家定職ヲ繼ク○八月
魯西亞ノ兵艦長崎ニ來リ其水師提督布恬廷書ヲ奉行
水野筑後守ニ呈メ曰今ヨリ隣好ヲ修メ柄太ノ界ヲ正
シ貨物ヲ貿易セン十月幕府筒井肥前守川路左衛門尉

儒員古賀増ヲ長崎ニ遣リ答書ヲ與ヘテ曰柄太ノ疆界
宜ク圖籍ヲ按メ絲毫ヲ誤ル可ラス互市ニ至テハ祖宗
ノ法アリ俄ニ改ルヲ能ハス頃口米國モ亦來リ請フ今
若シ之ヲ許スハ萬國必ス來リ乞ハシ一ヲ以テ萬ニ
應ス其カノ給不給未タ測ル可ラス凡ソ至重ノ事ハ必
ス之ヲ天朝ニ奏シ之ヲ諸藩ニ謀ル我カ國法ナリ然ラ
ハ則チ三五年ヲ經ルニ非レハ確定スルヲ能ハス況ン
ヤ我國貴國ト境界相接ス尤モ鄭重ヲ加ヘスンハアル
可ラス幸ニ之ヲ領セヨ○九月諸侯ニ令メ戰艦ヲ造ラ
シメ且砲臺ヲ品川海ニ築キ大礮ヲ鑄又蒸氣船及ヒ兵

艦ヲ和蘭ニ購フ、先是長崎ノ高嶋四郎太夫ノ禁錮ヲ釋シ、江川太郎左衛門ノ附屬トナス、高嶋泰西ノ銃法ヲ善クシ、門人頗ル多シ、事ヲ以テ禁錮セラル、是ニ至テ其長技ヲ取テ、其罪ヲ宥ルス、或ハ云江川カ幕府ニ請フ所ナリト、○十一月、幕府令メ曰、銃礮ハ西洋ヨリ傳フル所、今其製ヲ模造メ之ヲ用ユ、固ヨリ當今ノ要務ナリ、然ル發放線練ニ至テモ、亦彼カ言語ヲ用ル者アリ、甚タ不可ナリ、今ヨリ、大艦諸器械ニ至ルマテ、彼カ長ヲ取テ、我カ短ヲ補ハントス、宜ク皆國語ヲ以テ譯スヘシ、否ラサレハ徒ラニ新奇ニ馳テ、國體ヲ失ハシ、○是月、源家定ヲ以テ

征夷大將軍トナシ、右大臣ニ遷ス、○十二月、水戸中納言齊昭、管テ鑄造スル所ノ大礮、七十四門ヲ幕府ニ獻ス、將軍之ヲ賞シ、賜フニ鞍馬ヲ以テス、○安政元年、正月十三日、米利堅ノ使節波理、再ヒ兵艦六艘ヲ以テ浦賀ニ來リ、進テ本牧ニ泊シ、去年ノ答書ヲ求ム、幕議未タ決セズ、時ニ使節波理疾アリ、廿七日、其參將阿單須進テ神奈川海ニ泊シ、直チニ江戸ニ至テ之ヲ決セントス、井戸氏榮等、浦賀ヨリ返テ應接シ、國禁ヲ擧テ之ヲ停ム、阿單須抗弁メ、退ク色ナシ、遂ニ假館ヲ横濱ニ設ク、水戸中納言、素ヨリ尊攘ヲ主ト為ス、因テ機ニ乘メ之ヲ拒絕シ、大ニ國威

ヲ張ンテ議ス、老中阿部正弘等從ハス、越中守細川忠
護モ亦精銳ヲ選テ之ヲ擊シテ請フ許サス、三月、遂ニ
使節ヲ假館ニ延テ之ヲ饗シ、薪水食料ヲ給シ、漂民ヲ撫
恤シ、下田ノ地七里ヲ貸シ、松前箱館ニ來泊スルヲ許ス、
六月、使船皆退キ去ル、尋テ魯西亜和蘭ニ亦之ヲ許ス、
○初メ長州ノ士、吉田寅次郎、兵學ヲ松代ノ儒臣、佐久間
修理ニ受テ、修理象山ト号シ、寅次郎松陰ト号ス、象山每
ニ曰、方今ノ要務ハ海ニ航メ彼カ情狀ヲ知ルニ在リ、松
陰元ヨリ志慨アリ、大ニ其說ヲ喜ヒ、去年魯西亜ノ船ニ
乗ヒテ欲メ長崎ニ赴ク、船既ニ退帆メ志ヲ得ス、是ニ

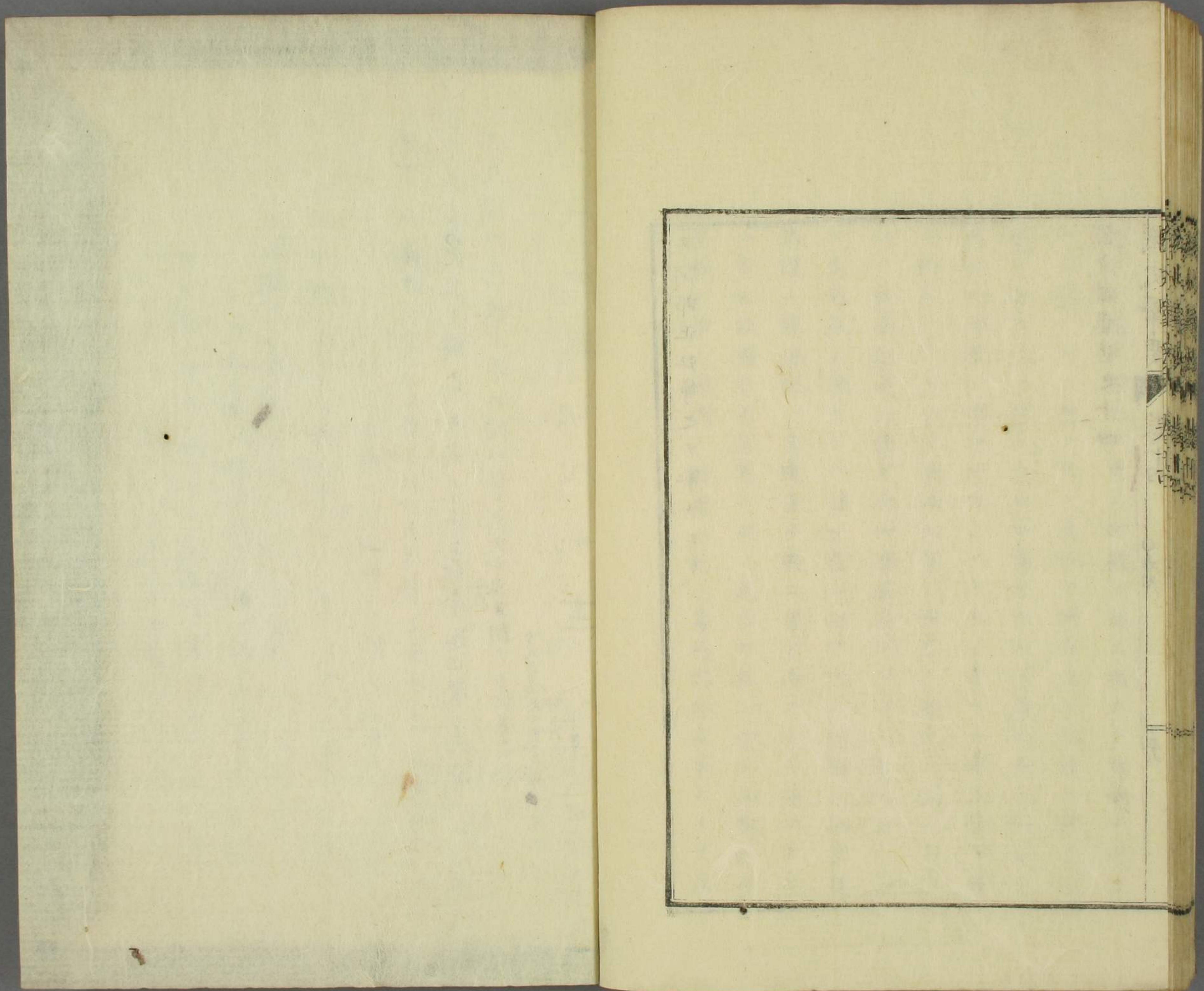
至テ象山從テ浦賀ノ警衛中ニアリ、松陰其門人澁木松
太郎ト同ク、往テ之ヲ象山ニ謀ル、象山密カニ之ヲ周旋
シ、浦賀ノ小吏吉村一郎ニ託ス、松陰遂ニ松太郎ト共ニ、
夜ル米船ニ入テ附載ヲ請フ、使節許サス、之ヲ送り返ス、
其國禁ヲ犯スヲ以テ、其藩ニ禁錮シ、象山モ亦幽セラレ
○四月、大内災アリ、幕府救ヲ奉メ、改造シ、明年成レ、此時
金銀及ヒ絹帛ヲ主上及ヒ準后ニ獻シ、又金數千兩ヲ災ニ
遭フ播紳ニ分チ給ス、○七月、英吉利ノ軍艦長崎ニ來リ、
書ヲ奉行水野忠篤ニ呈メ、曰、我カ國王鄂羅ノ凌暴ヲ惡
シ、土見其ヲ援テ、兵ヲ交エ、擊テ之ヲ破リ、其敗兵ヲ逐

テ来ル、今ヨリ近海ニ於テ砲戦シ、或ハ薪水ヲ乞ヒ、器械
ヲ繕フ、アラン、貴國其レ之ヲ許セト、幕議乃チ長崎箱
館ニ泊スルヲ許ス。○九月魯西亜ノ船、大坂ニ来リ書
ヲ以テ吏ニ附シ、遂ニ南メ下田ニ至ル、時ニ下田ノ海盜
レ、其船大ニ壞ル、下田ノ吏人善ク之ヲ遇シ、其破壊ヲ繕
ハシム、魯人喜テ去ル。○二年三月、先是詔メ天下ノ梵鐘
ヲ收メテ大砲ヲ鑄造セシム、是月幕府朝命ヲ天下ノ候
伯ニ傳フ、己ニメ智恩院宮闕ニ詣テ上書シ、輪王寺宮、亦
夕幕府ニ上書メ之ヲ諫ム、事遂ニ罷ム。○七月、和蘭幕府
ヨリ託スル所ノ、蒸氣船ヲ以テ来リ納ル、幕府乃チ矢田

堀景藏勝麟太郎等ヲ長崎ニ遣テ、其運用ヲ學ハシム。○
十月二日夜、關東地大ニ震ヒ、江戸尤モ甚シク、城郭邸宅
悉ク破壊シ、火ヲ出ス、五十餘所、死スル者十萬四千人。
○三年七月、大坂ノ兩川口ニ砲臺四座ヲ築ク。○先是幕
府、米魯ノ國ニ、薪水ヲ給シ、土地ヲ貸シ、米泊ヲ許スノ
未タ貿易ヲ許サス、是月米利堅ノ人、巴爾理斯、國書ヲ持
シ下田ニ来テ曰、本國ヨリ日本ニ滞在メ貿易ノ全權ヲ
執ルヲ委任セラル、因テ親ク將軍ニ謁メ、其書ヲ呈セ
ント請フ、尋テ英吉利モ亦長崎ニ来リ、蘭人ニ依テ貿易
ヲ請フ、書辭切迫ナリ、老中阿部正弘以下、大ニ之ヲ憂ヘ、

密カニ議メ謂ラク、既ニ和親ヲ結ヒ、繼クニ通商ヲ以テ
ス、此禁一タヒ弛ムキハ、其他ノ諸國必ス相踵テ来ラン、
彼ニ許メ此ヲ拒ム、忽チ乱階ヲ生ス、我國航海ノ術未タ
熟セス、防禦ノ備未タ全カラス、之ヲ許セハ國力給シ難
ク、許サ、レハ大本猶弱シ、實ニ國家ノ安危ニ關ルト、大
小ノ監察、評定ノ諸官、長崎浦賀箱館下田ノ奉行等ニ命
メ、其意見ヲ陳セシム、諸吏書ヲ以テ之ヲ詳論シ、且ツ曰、
米國ノ應接、既ニ其機會ヲ失フ、今千悔スルモ及ハス、○
八月、堀田備中守正篤ヲ以テ老中ト為シ、尋テ外國事務
總裁ヲ命シ、同例ノ首坐ト為ス、幕府内外多事ナルヲ以

テ、阿部正弘等之ヲ舉ルナリ、



卷之七
七

